

学校生活の向上につながる道徳授業実践

～生徒の心に響く効果的な指導方法の工夫を通して～

M11EPO09

進藤英樹

1. はじめに

平成20年の中央教育審議会の答申に基づき、同3月に小・中学校の学習指導要領が改訂され、その中において、道徳教育とその要としての道徳の時間は一層の改善・充実が図られた。

しかし、このような道徳教育充実の方策が行われているにもかかわらず、文部科学省が全国すべての国公私立の小・中学校を対象としてほぼ5年ごとに行っている「道徳教育推進状況調査」によれば、平均授業時数こそ高い実施数を示しているものの、学年が上がるにつれて児童生徒が道徳の時間を「楽しい」あるいは「ためになる」と感じている割合は低下し、子どもの年齢が上がるほど、道徳の時間に教師が手応えを感じられていない現状が見られる。この原因の多くは、我々教師が道徳の時間の授業時数確保に加えて日々の授業の工夫改善を行うなどの次の一步をなかなか踏み出さずにいることによるのではないかと考える。

そこで本研究では、生徒の心に響く道徳の授業を行い、自らの考えや行動をよりよくしていこうとする、道徳的実践力を育てていこうと考えた。この道徳的実践力を育てることが、中学生の行動にプラスに働き、その効果により、一人一人の学校生活が向上することを願い研究を進めていくことにした。

2. 先行研究

道徳教育と生徒の学校生活の向上について牧崎幸夫氏は横山利弘氏の「たまごっち理論」を引用して次のように述べている。(図1)

『「あいさつをしよう。」「言葉を正しく使お

う。」などのように生徒の指導で扱うのは、主としてたまごっちの上の部分にあたる行動や言葉に対する指導である。たまごっちの上の部分は、個々の道徳的実践を指導する教育活動である。道徳教育（道徳の時間）で取り上げるのは、たまごっちの下の部分に当たる「心」、すなわち道徳性である。』(牧崎, 2011)

各教科、総合的な学習の時間及び特別活動などにおいて、たまごっちの上半分の指導が有効に機能するためにも、たまごっちの下半分である道徳的実践力を育てる道徳教育（道徳の時間）の充実が必要なのである。

そこで、本研究では、人の行為行動をコントロールする心の部分を鍛えるために、日常の道徳の授業を充実させ、生徒の向上しようとする心を育て、望ましい行為・行動に結びつけ学校生活の向上につなげていくという考え方を研究の中核とした。

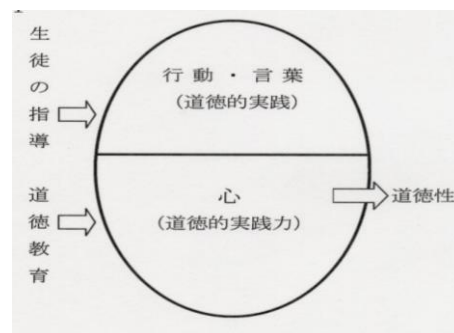


図1 「たまごっち理論」

3. 研究の目的

効果的な指導方法を工夫した道徳の時間の実施が、生徒の学校生活の向上を目指す一助となっているかを検証する。

- (1) 生徒の意識調査と道徳の時間のアンケートを実施し、道徳性の変容を知る。

- (2)生徒の心に響く効果的な指導方法の工夫を探る。
- (3)教師から見た（感じ取れた）生徒の変容を知る。

4. 研究の方法と内容

(1)生徒の意識調査と道徳の時間のアンケートによる実態把握の実施

- ①「生活自己分析カード」による，自己の振り返り
 - ・7月(第1回目)と2月(第2回目)に実施し結果を比較する
- ②「道徳の時間についてのアンケート」(質問紙)の実施
 - ・7月(第1回目)と2月(第2回目)に実施し結果を比較する

(2)生徒の心に響く効果的な指導方法の工夫による道徳授業実践

- ・今年度は，勤務校の学年において，二つの学級の道徳の時間を担当させていただいたので，初回の授業分析を踏まえ，同じ資料を使う次時の授業改善に生かす
- ①資料分析による発問の工夫
 - ・資料の構図を読み取り，ねらいに迫る中心発問を考える
- ②効果的な資料提示と発問の工夫
 - ・AV資料で興味関心を高める
 - ・資料を場面ごとに区切る方法（場面発問と一括提示する方法(テーマ発問)で生徒の記述を比較分析する
- ③書く活動の工夫
 - ・発問の改善と，それに伴うワークシート改善
- ④話し合いの工夫と発問の工夫
 - ・ラウンドテーブルやKJ法を用いて情報交換を活発にする活動を組織する
 - ・生徒の考えを，「ねらいとする価値」に導く発問の工夫
- (3)教師にアンケートを実施して，生徒の変容（成長）を調べる

- ・管理職，学年職員に協力していただき，生徒の変容（成長）を見取る

5. 研究の結果と考察

(1)生徒の意識調査と道徳の時間のアンケートによる実態について

①「生徒の意識調査」の実施

生徒の普段の生活の様子を把握するために道徳の時間に指導する内容項目を基準とした意識調査を実施した。

7月（第1回目）の意識調査による生徒の実態は，次の図2で示すように，どの質問項目に対しても，「A：よくできている（よく努力している）」や「B：できている（努力している）」が，多くを占めており，一部の生徒を除いては，2年A組・B組の生徒は毎日の生活に対して概ね意欲的に取り組んでいることがわかる。

しかし，細かく分析をしていくと，24項目中のアンダーラインを記した項目に対しては，あまり望ましくない結果となっている。さらに，総合自己分析のアンダーラインを記した項目において，「A：よく努力している」が，A組で2人，B組では0人，「C：あまり努力していない・D：努力していない」が，A組が10人・B組が15人と際だって望ましくない結果となっている。この傾向は，おそらく，2学年全体においても言えることであり，自分をあまり肯定的にとらえていない生徒の姿が見て取れる。

一方，グラフの上段と下段を比較すると，2月に行った第2回目の意識調査では，1回目の調査で望ましくない結果となっていた項目を含めて，ほとんどの項目において，AやBの占める割合がたいへんに高くなっていった様子が見て取れる。具体的には道徳の内容項目1－（4）理想の実現のなどが向上した項目の一つである。

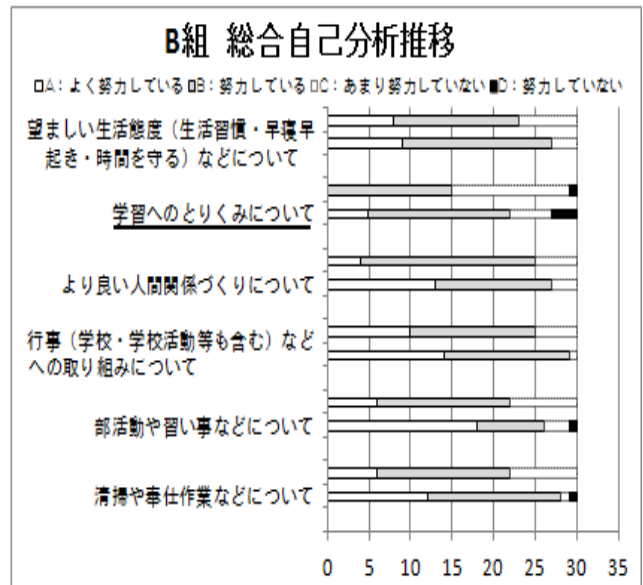
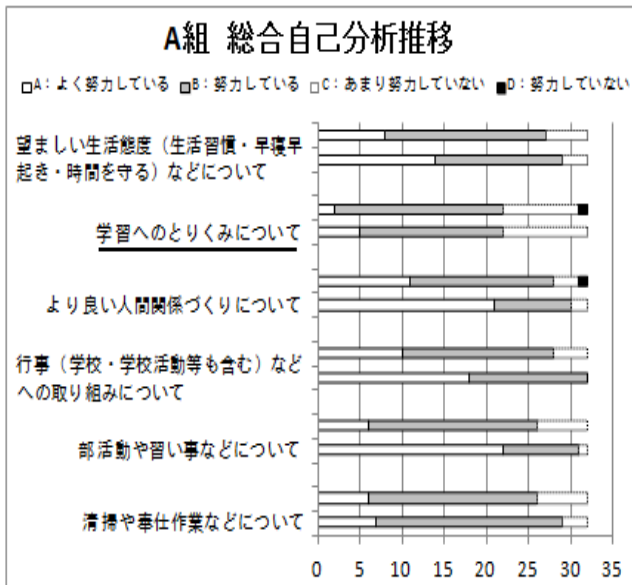
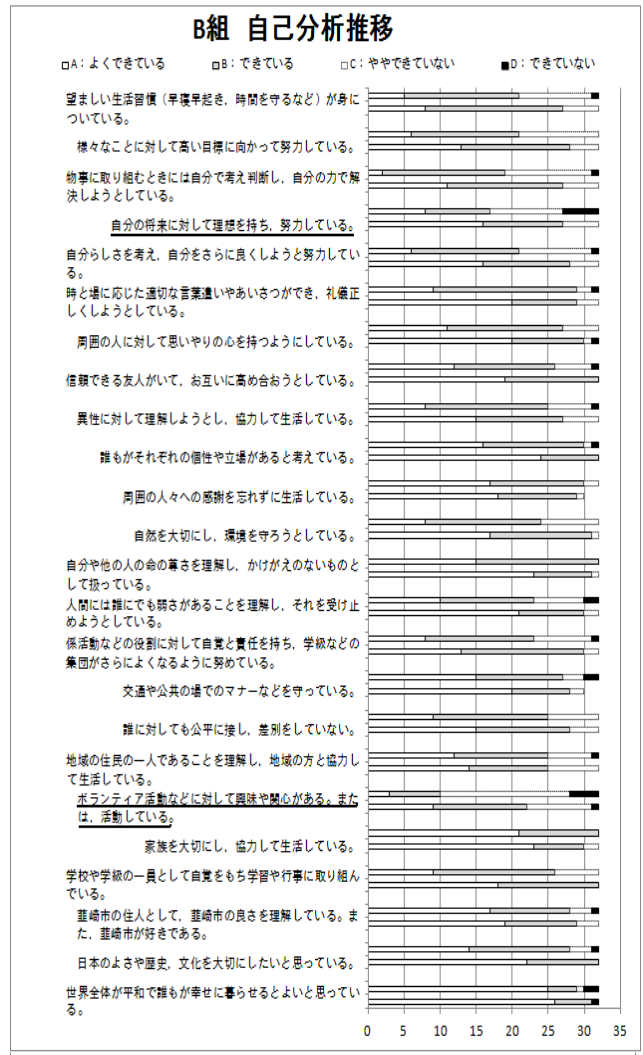
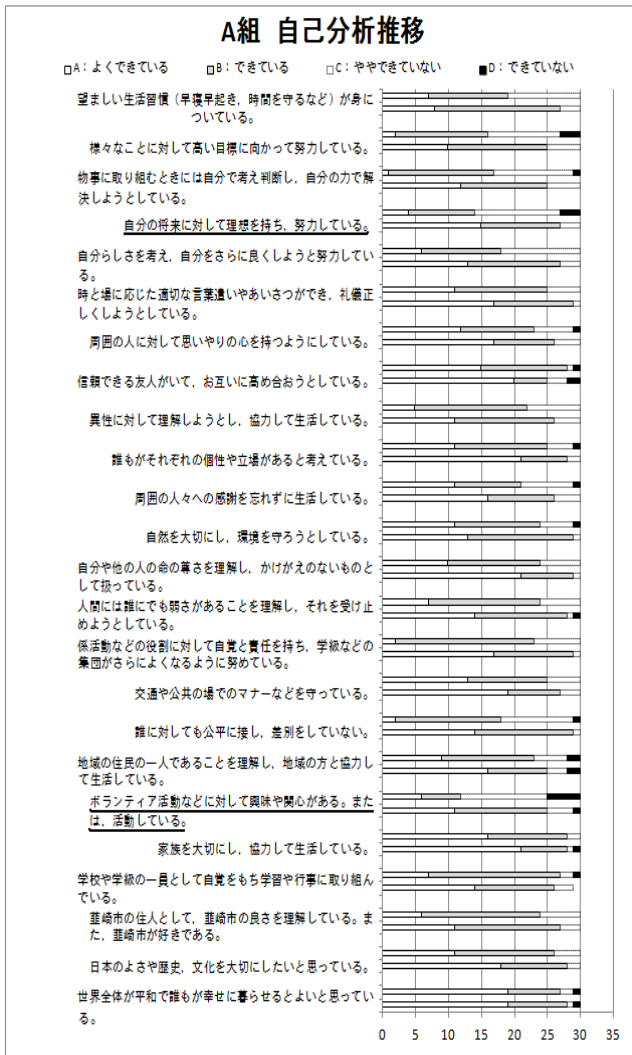


図2 生徒の意識調査 (上記4つの横棒グラフの各設問において上段7月, 下段2月)

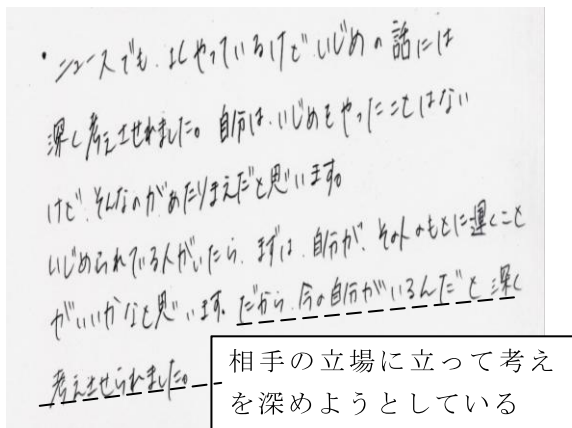
②「道徳の時間についてのアンケート」(質問紙)の実施

『今までに経験した「道徳の授業」で「自分の生き方」と関わって、深く考えさせられたことがあったら書いてください。』という項目で、「道徳の時間についてのアンケート」を、7月(第1回目)と2月(第2回目)に実施した。

結果として、7月のアンケートでは、「自分を大切にすること」「いじめのこと」「他の人の意見を聞く」などの記述があったが、「特になし」、又は無回答の生徒がたいへん多く見られたことが印象的であった。

一方、2月のアンケートでは図3・4・5のような「自己の生き方に対する自覚の深まり」を伺わせるような記述が見られた。

2年A組・B組で筆者が行ってきた道徳の時間では、ワークシートや授業感想シートなどを使って、感じたことや自分の思いを書かせる活動を行ってきた。学年の始めでは慣れていないこともあり記述の内容は質的にも量的にもわずかなものであった。しかし、回を重ねるごとに、しっかりと自己の生き方を見つめるような記述があり、質的にも量的にも向上が見られ、授業をしている筆者が驚くような生徒の姿を見ることができた。2月に行ったアンケートの記述例、図3・4・5で示した結果からも、2年生になってからの道徳の時間の積み重ねが、このような目に見える形となってきたことが伺える。



相手の立場に立って考えを深めようとしている

図3 「いじめ」についての考えが深まった生徒の記録

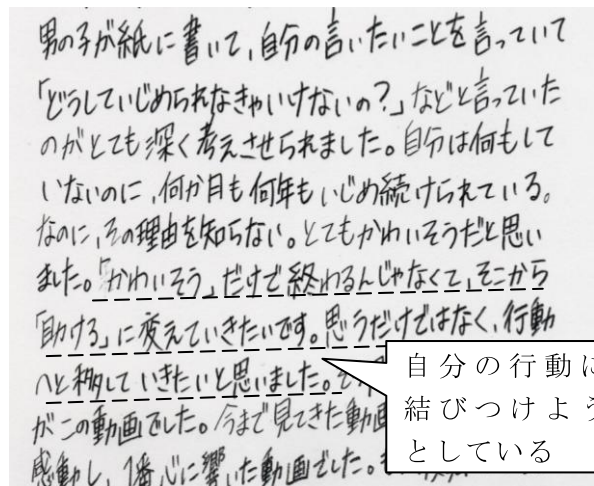
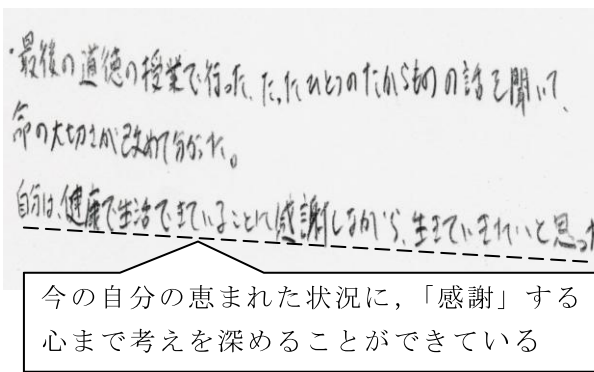


図4 「正義」「公正・公平」について考えが深まり、実践意欲をもった生徒の感想



今の自分の恵まれた状況に、「感謝」する心まで考えを深めることができています

図5 「感謝」についての考えが深まった生徒の感想

以上、①②の結果から、学年の始めと終わりを比べると、生徒の自己を見つめる見方が向上してきたことが伺える。第1回目の調査の後から道徳の授業を工夫して実施してきたことが、道徳心の向上や学校生活での意識改革の一助になったことが推察される。

(2)効果的な指導方法の工夫による道徳授業実践

○1年間の研究を通していくつかの指導法を試みたが、上記のとおり期間において実施した生徒の意識調査では、生徒の考えの深まりに向上が伺えた。この期間内で筆者は様々な工夫を凝らした指導法による道徳の授業を行ってきた。本紙ではその全てを示すことはできないので、次の2点を報告する。

①効果的な資料提示による発問の工夫

- ・場面発問を中心に授業をしたクラスとテーマ発問を中心に授業をしたクラスでの反応を、それぞれの記述により比較分析する
- ・A V資料で興味関心を高める
- ・資料名「片腕のアスリート ～じいちゃんに捧ぐ金メダル～」
(出典：片腕のアスリート フジテレビ)

- ・主題名「感謝」
- ・資料の概要

幼い頃事故で片腕を失った主人公が、家族の支えのもと、パラリンピックなどで活躍する物語である。

自分の力だけでメダルが取れたと感じている主人公が、父親の叱責によって、支えてくれている家族（特に祖父）の存在に気づき、その気持ちに応える感動的な資料である。本資料を通して、家族に対する感謝について考えさせていきたい。

・場面発問とテーマ発問の実際

年頃である中学生が涙してしまうような心を打つ資料であるにも関わらず一般的な指導方法である資料の場面ごとに区切って、その主人公の気持ちや、考えの根拠を発問する「場面発問」では、その都度「主人公が忘れていたことはどんなことか」とか「このときのおじいさんの気持ちは？」などの問いかけを行うために、受け答えはしやすいが、その反面、生徒自身が気になることや、考えたいことを明確にもつことが難しくなってしまった。場面発問の欠点として、資料の中の読み取りに終始するような授業となり、自分との関わりで思いをめぐらせる道德の特質を生かした授業にならないことが考えられる。

そこで、生徒がそれぞれの考えをしっかりとつなぐ中で、議論を巻き起こしながら、一人一人が自分の納得を見つけて欲しいと思い、「テーマ発問」を用いた授業を行った。

ここで言うテーマ発問とは、資料の主題やテーマそのものに関わって、掘り下げたり、考えたりする発問である。全体視点からの「主題発問」とも言える。

具体的な発問は、『「金メダルでなければダメなんだ」と思い続ける主人公の心の中にはどんな思いがあったのだろうか。』と問いかけた。

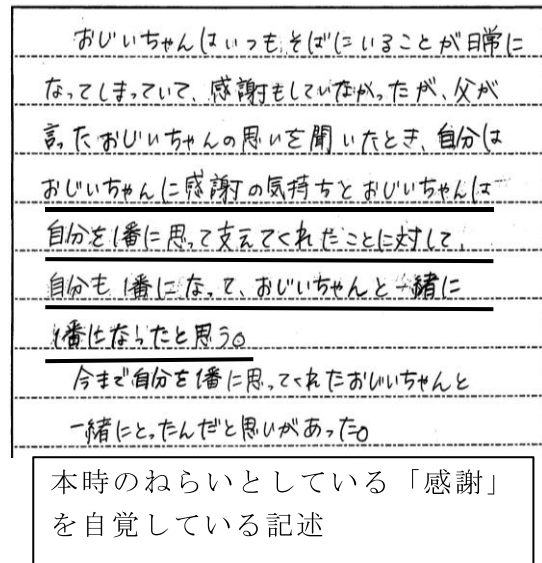


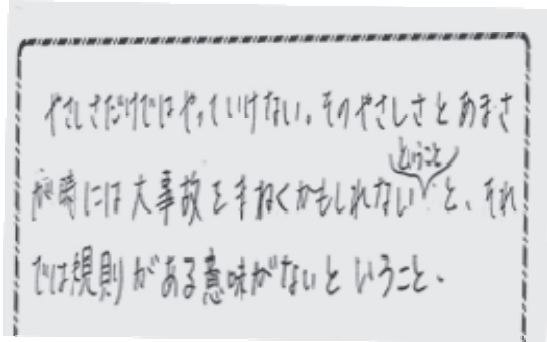
図6 テーマ発問での記述

・場面発問とテーマ発問の考察

結果として、場面発問においては、生徒の感想の中で「とても良い作品だった」という感想が多数示されていたにも関わらず、文章の読み込みに深まりをもたせることができなかつたために、生徒からの受け答えはとてよい反面、主題である「感謝」に関する発言はあまり無く、「家族愛」や「礼儀」に関するものがほとんどであった。

これに対して、テーマ発問においては、落ち着いた雰囲気の中で、長い時間、最後まで作品を読み込むので、発言などの勢いは失われてしまったものの、主題である「感謝」に関する記述は32名中25名であり、「報恩」(感謝とも考えられる)が5名、家族愛が2名であった。

しかし、多様な発言が得られたとしても道德の時間は、その時間のねらいとする価値の自覚が生徒に深まらなければ意味がない。



本時のねらいとしている「遵法・規律」を自覚している記述

図7 修正した中心発問での記述

そこで、1回目の授業の結果の反省を踏まえ、2回目の授業では、1回目と同様に小グループでの活動を取り入れ授業を進めたが、今回は「佐々木さんが、元さんの思い出を通して、山田さんに伝えたかったことは何か」を中心発問としたところ、ねらいである「遵法・規律」について記述した生徒が30名中21名であり、「人間愛・感謝」については30名中9名となった。(図7)

・話し合いの工夫と発問の工夫を取り入れた授業の考察

話し合いや、小グループ活動などを効果的に活用することで、授業自体は活性化され、盛り上げることはできるが、生徒のとらえが、ねらいとする価値からずれてしまうような場合は修正の発問を行う必要がある。

生徒の反応をもとにして、ねらいとする価値を深めるための発問を用意しておくことの必要性を知ることができた。

(3) 教師にアンケートを実施して、生徒の変容(成長)を調べる

今回の取組では、担当させていただいた2クラスについて、これまで以上に道德の時間について、より重点的に授業を行ったつもりである。

その結果、7月に行った生徒へのアンケート結果と、道德の授業を積み重ねた後で行った生徒へのアンケート結果を比較すると、学校生活への向上や、自己の生活についての考えを深める記述の頻度(割合)が高まったことは前述のとおりである。

また、図8は今回道德の授業を担当していた2年A組・B組の生徒の様子について、4月と比べて変化した点や気付いた点を、関係する教師に教師の立場でアンケートをさせていただいたものとりまとめである。

ほとんどの項目が「A:よく努力している」「B:努力している」の好意的な見方となっている。また記述による見取りでも、「学習に対する取組は意欲的になっている。授業での発言や問題などに挑戦しようとする姿勢が感じられた」「授業態度にも落ち着きがあり、1学期よりも3学期になるにつれて成績が上がってきたようである」などのコメントが寄せられている。

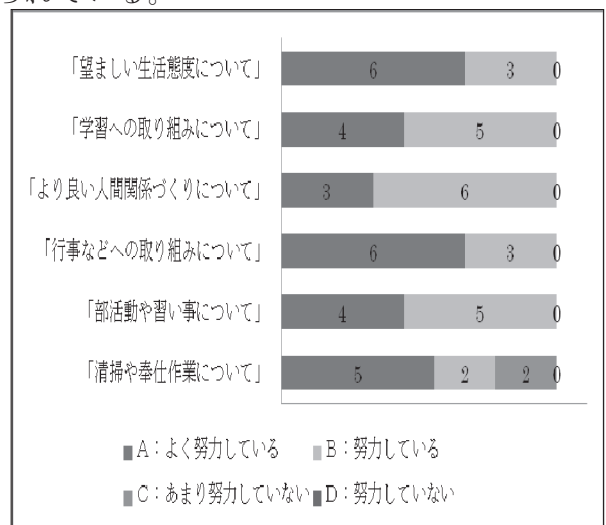


図8 教師から見た生徒の変容を見とるアンケート結果(管理職1名・教壇教諭8名)

これらのことから、道徳の授業を行って心を育てたことが、関係する生徒の行動に、何らかのプラスの効果をもたらす要因の一つになっていたと、考えることができるであろう。

6. 研究の成果と今後の課題

「心を育て行動を変える」ということについて今回実践をすることができた。7月と2月に行った生徒の意識調査の結果、約半年の間に実施した道徳の時間が、どの程度の影響を生徒に与えているかを明言することは難しいが、2回の調査で生徒の意識が向上していたことは研究の成果と言える。

特に特別な働きかけを行ったというより、日常の道徳の授業を工夫して実施したにすぎない。しかし、ねらいとする価値の自覚が深まるよう資料の分析や発問についての研究を進め指導法を工夫し、生徒の「道徳的実践力」（わき上がるような気持ち）を高める授業を行うことが大切であることを改めて認識した。

また、日々の道徳の授業は他の教科にもよい影響を及ぼすことを実感した。それは、道徳の授業を受け持たせていただいているクラスは、明らかに教科の授業中の発言率や課題などの提出率が向上した。また、身近に感じているのか、授業時間外などでの質問等の回数が日を追う毎に増加している。

このように、私が経験したことが、「道徳の授業を実践することは教師と生徒の距離を縮めてくれる」ことの事例と言えるとするならば、だからこそ道徳の授業は担任が行うことに意味があるのではなかろうか。生徒の個性や家庭環境を熟知している担任だからこそ、生徒の良さを認め、よりよく生きようとする気持ちを育て生徒の背中を押して、勇気付けることもできるはずである。

今後の課題としては、時数確保の問題から、質的に向上した道徳の授業を行うことを求められている時代の要請の中で、決してその場のぎとならない、「生徒の心に響く効果的な

指導方法を工夫した道徳の授業を、いかに研究・実践していくのか」である。

その、道徳教育の質の向上のためには、まず私自身が、本実践で試みた「効果的な資料提示による発問の工夫」や「話し合いの工夫と発問の工夫」などの成果を生かしながら、週に一時間の道徳の時間を大切にして、「道徳の時間の質を高める」取組を実践していきたい。

7. おわりに

今回の研究テーマに取り組むことで「道徳の授業」が「学校生活の向上」をもたらす一助になることを感じる事ができた。もしこのことを多くの学校や教師が実践するなら、大きな力となって、生徒や学校が変わっていくように思う。この研究で得た成果を同僚や若手教師に伝え、道徳教育のもつ底力を共有していきたい。

最後となりましたが、蕪崎市立蕪崎東中学校の小澤修一校長先生、実習をお世話くださった篠原俊明教頭先生を始め、諸先生方、共に充実した学校生活を過ごして下さった生徒の皆さんに心からお礼を申し上げます。

(参考・引用文献)

- ・牧崎幸夫(2011)「道徳の時間の実践的指導力の育成」龍谷大学論集 478号 P80
- ・文部科学省(2008)「中学校学習指導要領解説 道徳編」
- ・文部科学省(2008)「中央教育審議会答申」
- ・山梨県教育委員会(2010)「つばさ41号」
- ・横山利弘(2007)「道徳教育画餅からの脱却」暁教育図書
- ・横山利弘(2007)「道徳教育とは何だろうか」暁教育図書